現象学的還元の方法に関する文献レビュー

北谷　幸寛，八塚　美樹

富山大学大学院医学薬学研究部（医学）成人看護学１講座

はじめに

現象学的研究とは，現象学を哲学的基盤とした質的研究方法のひとつである．

その方法の目的は，一つの生きられた経験の意味を記述すること[1]であり，“事象そのもの”へ立ち返り，対象とする現象を分析する現象学の目的と合致する．

現象学研究において，現象学的還元を行うことは重要である．それは，既成の理論に基づく説明をやめ，物事各人の意識に表れるがままに受け取り，捉え直すこと，であり[2]，岩内[3]は，現象学的還元はフッサール現象学における根本原理であり，現象学の性格を全面的に規定していると言っても過言ではない，と述べている．また，佐藤[4]は，フッサール研究を行うことでも，フッサールやハイデガーなどの現象学者の学説を適応して研究対象を理解･説明しようと試みることでもなく，自らが現象学の基本原理を守って現象学者として事柄の現象学的な記述と分析を遂行することと述べている．また看護学研究の領域においても，Bevan[5]は，現象学的還元の構造やその方法論について明確に記述しておかなければ，研究の方法論的な信頼を損なう，と述べている．

このように，現象学の性格を根底づける現象学的還元は，現象学的研究において，最も重要な概念である．すなわち，現象学的研究を現象学として担保するためには，どのような方法で現象学的還元を行ったか，明記する必要性がある．

そこで本稿では，現象学の研究の信頼性を高めることを意義とし，現在までに述べられている現象学的還元の具体的な方法について，既存の現象学的研究をレビューし，その方法を明らかにする．既存の方法を明らかにすることで，現象学的研究の信頼性を高めるだけでなく，研究を行う際の参考となると考える．

研究方法

１．研究対象

和文献については，医学中央雑誌およびCiNiiを用いた．検索年数は限定せず，検索ワードは“現象学的還元”and“方法論”とした．

英語文献については，Pubmed，CINAHL，MEDLINEを用いた．検索ワードは“phenomenology” and “reduction” and “methodology”, “phenomenology” and “bracketing” and “methodology”とした．検索年および論文種は問わず検索をおこなった．

和文献・英文献共に研究抄録および論文全体を精読し，研究目的に沿った論文を選択した．また精読の際に，引用文献の中から研究目的に沿った論文であることが推測できた論文に対して，ハンドサーチを行い，スノーボールサンプリングを行った．

２．分析方法

対象となった文献から，現象学的還元に関する具体的な方法論が記述された箇所を抜き出した．また抜き出した方法について，研究過程を文献検討，データ収集，データ分析，記述として分割し，どの段階で何を行っているかわかるように，配置した．

３．文献選択

文献の選択に関して，図１に記載する．全体として，174編の論文が該当等した．具体的な内訳

として，和文献では計 14 編（医学中央雑誌 1 編，CiNii13 編），英文献では計 160 編（PubMed67 編，CINAHL39 編，MEDLINE32 編），ハンドサーチの結果 22 編が抽出された．そこから，重複する論文，タイトルや抄録の内容が本研究の目的と異なる文献を除外し，24 編の英語論文を精読した．論文を精読し，最終的に明確な方法が記述されている 12 編の論文を研究対象とした．

倫理的配慮

文献からの引用は著作権に配慮し，引用した文献の引用は正確に明記した．

結　　果

研究過程を，文献検討，データ収集，データの分析，記述にわけ，その具体的な方法を図 2 に示した．

1．文献検討

1）継続的な問いかけ

Colaizzi[6] は，研究者自身に以下の 2 点を常に問いかけることを推奨していた．

a. なぜ私はこの現象に関わっているのだろうか

b. 研究の価値についての私個人の思い入れや元々の態度が私の研究内容や方法にどのように影

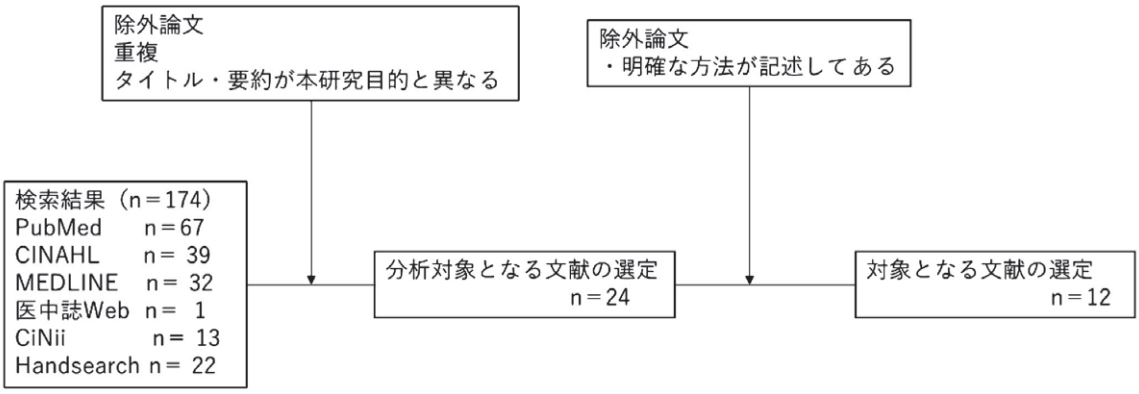

図 1　文献の選択過程

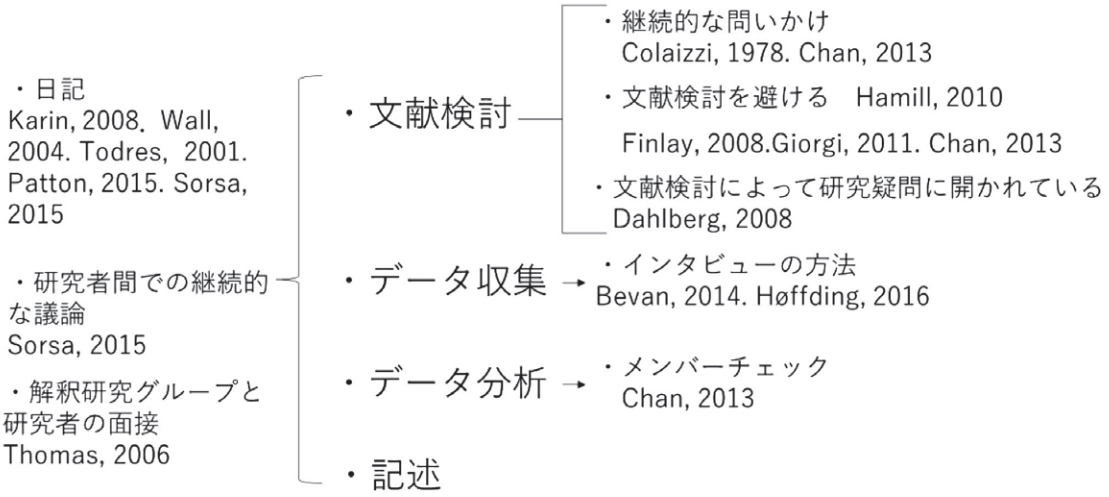

図 2　現象学的還元の方法

響したりバイアスをかけるのだろうか

Chan ら[7] は研究を始める前に，研究者の認識や考えについて，次のように問いかけることを述べている．

a. 私は，研究対象となる経験について学ぶのに十分謙虚であるのか

b. 調査対象について意識的に無知な態度をとれるようになっているのか

文献検討時には，「この分野への好奇心を維持しつつ，研究の意義を正当化できるほどテーマを理解しているか？」と問いかけることを推奨し，もしこれにそうだと，答えられうるならば，文献検討を中止できると述べている．

2）深い文献検討を避ける

研究者が先行研究から知見を得ることで，その対象となる現象への理解や前提を可能な限り排除するために，深い文献検討を避けることが推奨され[7–9]，研究者[10] によっては，データの収集や分析を行うまでは文献検討を避けることを推奨する文献もあった．また，文献の検討により，自らの先入観を批判的に理解し，研究疑問に対して常に開かれていることが出来るとする[11] もあった．

2．データ収集時

1）インタビューの方法

Bevan[5] は，現象学的な研究でのデータ収集のための最も有力な方法はインタビューであると述べており，現象学的研究法においてデータ収集をインタビューで行うことは自然である．また，現象学的なインタビューは，現象学的な方法論に忠実であるべきだが，実践的であり続けなければいけない．具体的なインタビューの方法として，表1を示す．Bevan が行った透析中の患者の体験に関する研究を例に挙げて説明している．

Høffding[12] は，現象学的インタビューについて，現象学的インタビューのマニュアルを提供することはできないし，提供したくないと述べているが，Vermersch[13] とPetitmengin[14] によって開発されたExplicitation Interviewが最もそれに近い，と紹介している．また，相互作用的なインタビューの場では，インタビューイーが自律的にあなたと出会い，同時に，インタビュワーが自律的なあなたに出会うと言うことである，お互いの理解と地平を発展させていく，とHøffding[12] は述べており，研究者だけでなく，研究参加者の重要性を述べている．

2）データ分析

Chan ら[7] は，データ分析の際の研究者の前理解を排除する必要性があることを述べている．また，それに対応する手段としては，Colaizzi の手法を上げており，それは研究参加者に対して分析結果を返し，研究者が誤った解釈を行っていない

表1　Bevan（2014）のインタビュー方法

現象学的態度	研究のアプローチ	インタビューの構造	方　法	質問の例
現象学的還元（エポケー）	参加者の自然的態度の受容	文脈主義（自然的な態度の元生活世界を明確にする）	記述的／ナラティブ的　コンテキストな質問	病気になったことについて教えてください。透析病棟にどのように行くようになったのか教えてください
	自我とともに反省的な批評的対話	現象（自然的な態度に表れる仕方）を捉えること	現れ方の記述的で構成的な質問	透析病棟の当たり前なときのことを教えてください。あなたが透析を始めたときのことを教えてください
	積極的に聞く	現象（想像的変容を通して意味）を明確にする	想像的変容：構成的な質問の多様性	医師がもしいつもいるのであれば、病棟での経験がどのように変わるか記述する

のか確認する手法である．つまり，メンバーチェッキングを行うことを推奨していた．

３．研究の全過程において

１）インタビューの方法

研究の全過程において，研究日記を作成すること，研究者間での継続的な議論を行うこと，解釈研究グループと研究者の面接を行うことが，現象学的還元の手助けとなることが明らかになった．

Wall[15] は，4 つの枠組みを作成し，研究日記を作成することを推奨していた．

1．事前の反省的な準備（事前にある特定の状況に対応できるように準備する時間を費やすこと），2．情報提供者へのインタビュー（状況を詳しく記述することと，その状況で影響を持つ要因について記述する），3．学習（新しく学んだことが，いくつかの状況の結果として，そしてその反省を行った結果か分類すること），4．学習からの行動（継続していくインタビューのように，他の状況で新しい学びがどのように役立つことが出来るかを明らかにする），である．これを Wall[15] は，Bracekting “pre-action”, Bracekting “in-action”, Bracekting “on-action” に行っていくことを推奨していた．

Sorsa[16] は，研究日誌として，研究期間中に常に自身の意見に対して批判的であることが求められている，としている．批判とは，新しい現象に，あたりまえの仮説の裏側に継続的に居続けようと試みることである，とし自身の仮説についての検討を継続的に日記として記述し，行うことを推奨していた．また，その日記を基に共同研究者との研究対象への仮説に対して，批判的に検討を行うことを推奨している．

Johnston ら[17] は Todres[18] と Patton[19] を引用し（そのため本研究では Todres と Patton としている），研究参加者の体験と同じように，研究者自身の体験にも同じように価値を置くべきだとしている．たとえば，研究参加者の安楽な体験を明らかにするときに，研究者自身の安楽な体験にも同じように価値を置き，そして，研究者が持っている研究対象となる現象（この例の場合安楽な体験）に関連した，前理解と仮説を日記によって明確にするように推奨している．それらを情報提供者から提供されたデータの分析の補助とすることで，現象学的還元の手助けになるとしている．

Karin[11] も，研究過程の始まりとともに研究対象の現象の前理解（Pre-understanding）を記述しておくことが価値のあることである，と述べている．彼女らも，すべての記述は，自らの前理解の知覚と反省となり，価値のあるものである．もし前理解が描写される場合にのみ，それは，分析の危うさの落とし穴を避け，もしくはそれを疑問視することを可能にする，としていた．

Thomas ら[20] は，共同研究者の解釈研究グループとの面接を，研究期間に繰り替えし行うことを推奨していた．この面接は，研究者の思い込みを浮かび上がらせることを目的としており，誘導的な質問が行われるとされていた．

考　　察

現象学的還元の方法に関する課題，研究者間での議論について研究目的に沿って考察する．

１．現象学的還元の方法に関する課題

研究者によって様々な現象学的還元のための方策がとられていることがわかった．このことは，現象学的還元の統一的な方法は存在せず，各研究者が独自の方法を作成しているということでもある．

Sparrow[21] が，現象学者であり得ることは，いかに適切な仕方で現象学的探求を遂行するかについての決定的な言明なしに置き去りにされてしまっている，と述べており，現象学の中でも統一した見解がもたらされていないと考える．

しかし，現象学はそもそもが，”事象そのものに” 立ち返ることを目的としている．岩内[22] は，何が主観的で何が客観的かを問うのではなく，どの事象に対してより広い合意を取り出せるのか，と考えるのだ．すると，従来まで「客観」という概念で呼ばれていたものは，研究者のあいだでの合意達成の程度問題に置き換えられる．その合意が明示的なものであれ暗黙のものであれ，自然科学が準備する一定の手続きにしたがって再現可能か

つ合意可能なものを，私たちは「客観的」と呼んでいるだけなのだ，と述べている．このことは，現象学的還元の統一した客観的な見解，というのは自然科学の領域で語られていることであり，自然科学としての現象学の見解であるならば問題ない．だが，現象学はそもそも客観主義への批判を基に作られた一つの学問体系（一方で，ハーバーマスからは新たな客観主義との批判もある）であり，現象学の領域で語られていることではないと言える．

これらのことから，ある画一的な現象学的還元の方法を作成するのではなく，それぞれの研究者が異なる事象に立ち返った研究者の現象学的還元の手法を参考にし，自ら取捨選択して現象学的還元の手法を考えていくことが，もっとも現象学らしい研究手法になるのではないかと考える．

しかし一方，各研究者がおのおの乱雑に研究手法を乱立していくことは,望ましくないと考える．上述のように，質的研究を自然科学とは位置づけずに，人文科学として位置づけたとしても，相対主義との批判は免れ得ず，それは同様である．

多元的実在論として，テイラーとドレイファスが人文科学の普遍性の可能性の条件を刷新しようとしているように，統合の可能性を開いたままにしておくこと――文化的多様性を一つの枠組みに押し込めるのではなく，文化的多様性を尊重しながら間文化的普遍性への希望を手放さないこと[22]．すなわち，現象学的研究の研究対象となる現象毎の多様性を認め，それでも手法としての現象学的研究法の間文化的普遍性を探究し続けることが，求められていると考える．

今回，複数の研究者[23-25]も研究者の先入観や仮説について検討すべきである，と述べている．このことは，現象学的研究において，研究対象となる先入観や仮説を検討し，その検討した内容を実際のインタビューデータを前にしたときに，エポケーのためにまたはその先入観を活かした上で，データの分析をすることが求められていると考える．

特に現象学者によって還元の考え方が異なり，現象学でもフッサールの立場に立つか，ハイデガーの立場に立つか，現象学のだれの考え方に自らの哲学が近いか，研究を開始する前に検討すべきなのではないかと考える．

今回現象学的還元を行うために，何を検討すべきかという間主観的普遍性について，研究者自身の仮説や先入観であることが改めて確かめられた．問題は，それをどのように検討するのか，という点と，研究過程の中でどう活かしていくか，という点をそれぞれの研究対象とする事象と自らの現象学に対する考えを基に，組み立てていかなければならないのだと考える．

２．研究者間での議論について

Sorsa[16]やThomasら[20]は，研究の全過程において，共同研究者との議論もしくは研究者グループとの面接を必要としていた．これは，フッサールがよく使用した言葉“ともに哲学する”があるように[26]，共同研究者との議論が研究過程全体で必要であるということである．このことは，常に現象学的態度がとれるというわけではなく，自然的態度でデータの分析をしている可能性があり，他者との議論により現象学的態度でのデータ分析を継続させ，自然的な態度に戻る可能性を減少させることが目的だと考えられる．

特にThomasら[20]は括弧でくくることは一度行えば済む作業ではない．動的で継続的な過程であり，研究者は考察と括弧でくくる作業と直感のサイクルを繰り返すと述べている．また，村上[27]はフッサールについて，フッサール自身も絶えず自分が日々経験している事象に立ち返っていた．彼が速記を用いて遺した膨大な草稿群は事象と現象との間のジグザク往復の軌跡である，と述べており，研究過程においてエポケーの継続が必要であり，そのためには共同研究者の位置づけが必要となると考える．哲学者の意見を追記するとすれば，田口[28]は，フッサールは，現象学の研究が共同作業によって進むことを絶えず強調した，と述べており，共同研究者の重要性がわかる．

これらから，先入見の検討のためには，研究対象となる現象についての面接を行うのではなく，お互いの先入見を検討できるよう対等な研究者の立場をとり，対象となる現象についての議論の場をもち，かつ継続的な議論を行っていくことが研

究過程の中で求められる.

事前の準備として，共同研究者を含めた研究者自身の知識や前提を検証し，継続した議論を行うことが望ましいのではないかと考える．そして，その前提を検証する際に, 文献検討を行わないか, 常に開かれた態度をとるために文献検討を行うかは，研究グループでの現象学観を基に，議論し，決定していく必要があるのではないかと考える.

結　論

現象学の性格を根底づける現象学的還元の手法は，研究の全過程，またはその一部においてどれも多様な性質を持ち，研究者毎に異なる手法がとられていることがわかった. その中でも共通して，研究者の先入観をどのように検討するのか，という点で共通点を見出すことが出来たのではないかと考える．ただし，本研究で明らかになった手法を用いるのではなく，それぞれの研究対象とする事象と自らの現象学に対する考えを基に，組み立てていかなければならいのだと考える.

本考察では, 現象学的還元の方法の課題ついて, そして，研究者間での議論について研究目的に沿って考察していた．しかしメンバーチェックについては，テセウスの船のパラドックスである，同一性の問題が解決できず，フッサールは，人間の志向のみが無限の地平を持つ，と述べており[29]，インタビュー時とメンバーチェック時の情報提供者の同一性については議論が必要であるため，今後の課題とする.

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない.

謝　辞

本研究は，令和元年度富山大学学長裁量経費④若手・女性研究者支援経費「患者のその人らしさの追求を可能にする現象学を基盤とした研究枠組みの開発」の助成を受け，行った研究の一部である。

引用・参考文献

1）Starks, H., Trinidad. S. B: Choose Your Method: A Comparison of Phenomenology, Discourse Analysis and Grounded Theory. Qual Health Res 17（10）：1373-1373, 2007.

2）松葉祥一，西村ユミ編著：現象学的看護研究理論と分析の実際，医学書院，東京，2014.

3）岩内章太郎：現象学的還元とは何か, Waseda Global Forum，13，53-76，2016.

4）佐藤真理人：現象学的に考察するとはいかなることか，早稲田大学大学院文学研究科紀要 . 第 1 分冊，51，13-28，2006.

5）Bevan, Mark T: A method of phenomenological interviewing. Qual Health Res 24（1）：136-144, 2014.

6）Colazzi. P. F: Psychological research as the phenomenologist views it. In R. Valle & M. King(Eds), Existential-phenomenological alternatives for psychology，pp. 48-71，New York，Oxford, 1978.

7）Chan C, Fung YL, Chien WT : Bracketing in phenomenology: only undertaken in the data collection and analysis process , Qual. Rep 18：1-9, 2013.

8）Finlay L: A dance between the reduction and reflexivity: explicating the ‘phenomenological psychological attitude’. Journal of Phenomenological Psychology. 39,（1), 1-32, 2008.

9）Giorgi A : IPA and science: a response to Jonathan Smith. Journal of Phenomenological Psychology. 42, 2, 195-216, 2011.

10）Hamill C: Bracketing-practical considerations in Husserlian phenomenological research. Nurse Res 17：16-24, 2010.

11）Karin D，Helena, D，Maria N，etal : Reflective Lifeworld Research (2nd), Studentlitteratur, Sweden, 2008.

12）Høffding S, Martiny K: Framing a phenomenological inerviw: what, why, how. Phenomenol Cogn Sci 15：539-564, 2016 .

13）Vermersch P: Introspection as practice. J Conscious Stud 6（2-3）：17-42, 1999.
14）Petitmengin C: Describing one's subjective experience in the second person: an interview method for the science of consciousness. Phenomenol Cogn Sci 5（3-4）：229-269, 2006.
15）Wall C, Glenn S, Mitchinson S, etal: Using a reflective diary to develop bracketing skills during a phenomenological investigation. Nurs Res 11（4）：20-29, 2004.
16）Sorsa MA, Kiikkala I, Åstedt-Kurki P: Bracketing as a skill in conducting unstructured qualitative interviews. Nurse Res 22（4）：8-12, 2015.
17）Johnston CM, Wallis M, Oprescu FI, etal: Methodological considerations related to nurse researchers using their own experience of a phenomenon within phenomenology. J Adv Nurs 73（3）：574-584, 2016.
18）Todres L, Wheeler S: The complementarity of phenomenology, hermeneutics and existentialism as aphilosophical perspective for nursing research. Int J Nurs Stud 38（1）：1-8, 2001.
19）Patton M. Q: Qualitative Research and Evaluation Methods,4th edn. Sage Publications Inc, Thousand Oaks, California, 2015.
20）Thomas S. P, Polio H. R：患者の声を聞く. 川原由佳里監訳，エルゼビアジャパン，東京，2006.
21）Sparrow, T: The End of Phenomenology, pp3, Edinburgh University Press, Edinburgh，2014.
22）岩内章太郎：新しい哲学の教科書　現代実在論入門（講談社選書メチエ），講談社 . 東京，2019.
23）Christine W, Sheila G, Susan M, etal: Using a Reflective Diary to Develop Bracketing Skills During a Phenomenological Investigation, Nurs Res: 11（4）, 20-29, 2004.
24）Colleen M. J, Marianne W, Florin I. O, etal: Methodological considerations related to nurse researchers using their own experience of a phenomenon within phenomenology, J Adv Nurs 73（3）：574-584, 2016.
25）Constance T. F: Bracketing in Qualitative Research: Conceptual and practical matters, Psychotherapy research method 19（4-5）：583-590, 2009.
26）谷徹：これが現象学だ，講談社，東京，2002.
27）村上靖彦：摘便とお花見，医学書院，東京，2013.
28）田口茂：現象学という思考　＜自明なもの＞の知，筑摩選書，東京，2014.
29）浜渦辰二：文化の現象学のために：フッサールの間主観性の現象学の問題圏から，静岡大学人文学部紀要『人文論集』43（2），111-151, 1993.

Phenomenology, Reduction and Methodology : Literature Review

Yukihiro KITATANI, Miki YATSUDUKA

Adult Nursing 1, Department of Nursing, Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences, Toyama University